



オレンジ色の T シャツ

弥生

「サラリーマンにはなりたくない」

大学入学を果たした頃、次男の武史はポツリと言った。だからと言ってまだ先のことは考えていないようだ。その時私は子供の頃から聞いていた話を思い出していた。南伊豆が私のふるさとである。

「男として生まれたからにやあ、他人に使われているようじゃあしょうがねえど」父が少年だった頃、父親に言われたという。祖父の言葉が我が家には伝説のように知られていた。残念ながら父は親の期待に添える男にはならなかった。その様子を見て育った私は毎月給料を貰える人になってくれたらどんなに安心だろうと思ったのだ。しかし武史の人生だ。「大学を卒業するまでは必ず送金するが親を頼るのはそれまでですよ」とはっきり伝えておいた。それからの日々大学生活を大いに楽しみ学び充実した日々が感じられた。

だが、いよいよ卒業の日が来たのに「今までありがとう」の言葉も無くいきなり「^B＆^Tビー
アンドティー」としてメジャーデビューが決まりCDも発売されたから函南方面の店を回る」と言ってきた。それは一九九八年のことでした。吃驚仰天とはこんな時に言うのだろう。デビューできるのは大変難しいのは分かっている。だが歌ですぐ生活できる収入は望めないだろう。もう送金はしないと決めてある。とても心の底から喜べる気持にはなれなかった。

高校生の時、出合って武史と和之は仲良くなった。二人がハモる歌を聞いた先生は「お前達の声はいいなあ」と感心する程だったという。和之も大学を目指したのだが入試に失敗し予備校に通い始めた。しかし歌への魅力は忘れられなく歌だけの道を選んだ。

いよいよ函南、三島方面の三店舗を回る為二人はやって来た。プロダクションの人が何人かついて来てくれていた。驚いたことに店には何十人も若者が待っていた。親の知らぬ間に世間に少しずつ知ってもらえるミュージシャンになっていたのである。武史は東京の大学へ。和之は予備校へ通う為、東京へと住む場所も近かった。二人してコンテスト等お客様の集まる場所で歌う日が多くなっていたという。

和之は高校生の頃から多くの作品を生み出しその才能は並外れていた。発売されたCDの作詞作曲はほとんど和之作なのだ。この時はプロダクションに入っていたから親は見守るばかりだった。以後の二人の暮らしは目まぐるしい日々となった。北海道から九州まで歌の宣伝の旅が始まる。心配した住まいは和之の下宿に同居させてもらい台所が寝室だと言った。そこまでして歌いたいのならつき進むしかないだろう。

それからの日々、買い物に行けばB&Tの曲が流れている。側に居た店員に思わず「これ、家の息子と友達、二人で歌っているんです」なんて言ってしまう。店員も立ち止まり「へえ、

すごいじゃないですか」聞き終わると「とても面白い歌ですねえ」と感心したように言ってお下さる日もあった。又、夫と買物に行く途中カーラジオから二人のトークと歌が聞こえたりした。南伊豆の友達からも函南の我が家へ電話があり「今日、スーパーで息子さん達の歌を聞いたよ」と興奮ぎみに話してくれたこともある。こうして私の回りは驚きとワクワクの混ざった空気がただよい始めていた。だがデビュー二年目のこと。夢から覚めるような事態となった。二人は解散するという情報が友達やファンだという人から連絡が入ったのだ。武史にも和之にも電話がつかない。そのうち何か言ってくるだろうと待つことにした。「解散は嘘じゃないの？ 昼頃元気な歌が流れていたよ」と知らせてくれる人も居た。それはCDがかけられていたのだろう。しばらくたって武史から「解散したから。和之の体調が悪くてすぐには直りそうもない」と言う。親はとっくに知っていたことだが理由ははっきりしなかった。で、そうだったのかと納得した。和之の病状は詳しく言わない。命にかかわるような病気なのかと不安はふくらむばかりである。せっかくデビューできたのにコンサートを開くことも無く終わるのか。大きな落胆で気分は沈んだ。二人の気持を思うとなおさら辛い。「じゃ、武史はこれからどうするの」「しばらく友達のお店を手伝って東京に居て先のことを考える」と言う。自分で決めた道が断たれたのだから、又、始めから考え直すことになる。

「CDを出してあるのは良かったんじゃないの。先のことは分からないからさ」と慰めのよう

な言葉をかけてくれる知り合いも居た。

一年間程アルバイトをして過ごした武史から電話があった。「花屋を目指すことにした。大学の友人の家が熊本の益城町で手広く花屋を開いているので住み込みで働きながらアレンジメントや経営のこと等、学んで来るから」と自分の進む道を見つけたように明るく語った。あくまでも、どこかに務めようとは考えない様子だ。「はい、がんばって行ってらっしゃい」と答えるしかない。その花屋さんは花の栽培まで手掛け家族で経営しており武史も快く迎えられたようで安心した。

その年の母の日、武史からつるで編んだ大きなかごに二十種類位の花の苗が形良く入れられて届いた。いくつか花の咲いたのもある。中でもたった一輪ピンクのバラが咲いて目立っていた。次第に我が家の狭い庭は花があふれるように咲いていった。そこに立って眺める時、私は心豊かな気持ちに包まれた。

武史は熊本での日々を一年間、楽しく学びながら過ごしおいとまをする時が来た。お店のご近所の方や小さなお子さんからも、お別れの手紙をいただき、それらを大切に携えて帰って来た。これからはどこかの花屋で働いて開店の資金を貯め学びたりないことも身につけるという。職案に行ったり何軒か店を覗いたりする日が何日続いた。ようやく気に入った店

が見つかり、働かせてもらえるか面接から始まり決定した。それからが長かった。六年近くその店で働いた。花屋を開く目標があったからだろう。急がしくて夜中に帰ることがあっても、さっと起き元気に出かけてゆく。資金が少しでも早く貯まるよう私は毎日の弁当作りを続けた。数年すると店の休日に東京へ行き開店する場所を探していた。友人も協力してくれたという。

花屋に勤めて五年目の頃、南伊豆で一人暮らしをしていた母が同居した。九十八才の母は年のわりにしっかりしているように見えたが、お風呂に入っても心配で目が離せない。あちこち身体の不調も訴えるので病院へ行くと医師は「特に悪い所はありません。年令と共に内臓も年を取り働きが弱りますからね」と薬も出ない。家に帰ると母は私に苦情を言う。「こんなに苦しんでいるのにどこが悪いかも分からないのか。どうしようもないやぶ医者だ」と。母を見ながら武史のことも気にかかる。介護の疲れも有りいら立ちは募った。「いつまで弁当を作らせる気なの！明日からは自分でつめていって」と強い口調で言ってしまった。そんなことがあって程なく開店の準備らしいことが始まった。ユーチューブに花屋のブログを立ち上げるから自分が制作したアレンジメントの撮影をしていると言った。以来、撮影済みの様々な花を持ち帰るようになった。母はそれを楽しみにして「きれいだなあ」と言いながら心も安らぐ様子だった。

誰が見ても夫に似ていると言われるのに、「武史はお父にそっくりだ」なんてひとり言。昔の人にしてみれば背が高かった父と背の高い武史。その所だけは似ていたのかもしれない。

店を開く場所も決まったという。預金も予定まで達成したのか確認はしなかった。月々二万円食費として渡されていたお金は手をつけずに有ったので開店の補助金とした。武史は断ることもなく受け取った。その頃、軽のワンボックスカーを講入していたので資金は多いに越したことはないだろう。車の後部は花を積まれるように改装されていた。「店の中を自分で手を加えたい所があるので開店は一ヶ月後になるよ」と言った。そして二〇〇九年十月二十日、愛車に乗っていいよ東京へ出発したのである。その夜は大雨となった。

長泉町にある社宅のアパートから函南町へ引っ越したのは安史が小学校三年、武史は保育園に通っている頃のこと。

山の上の我が家である。子供達は玄関を出ると下り坂、上り坂を何度も繰り返し広い道に出る。その道を横切り又、山の頂上にある学校へと登ってゆく。毎日が遠足のような登校だった。時には「ただいま」とランドセルを置くと「弘くんちへ行ってくる」と飛び出してゆく。そのお宅は広い道へ出てからの場所だ。兄弟で同じようなことをしていた。

学校が遠くていやだとか疲れるとか聞いたことがない。

越して来たばかりの頃、子供が部屋で飛びはねると「下の家でうるさいよ」うつかりアパート暮らしの気になってしまふことがあった。「お母さん、下にはありんこしか居ない」なんて言われて皆で笑った。大自然の中で子供達は思いきり活動的に過ごし成長していった。

武史の小学校の卒業アルバムに「あの時の歌が良かった」「コンサートを開いたら呼んで」等の書き込みがある。歌うのが好きなかとの時、始めて知った。

武史が東京へ向かった日の夜の大雨は朝になると驚く程の良い天気になっていた。家の東側には、くぬぎ林が有る。窓を開けるとその中にダイヤの様に光輝くものが見えた。じっと眺めて、ああ、夕べの雨の雫が木のくぼみか葉に溜まっているのだと分かった。それは朝日に輝き、風が吹けばさらにゆらめきながらきらめく。なんという美しさだろうと見とれた。五分以上見ていたが何も変わらない。思わず「どうか武史の店が軌道に乗りますように」と祈っていた。と同時に解散以来、詳しい状態が入らない和之の病状はどうなっているのか気になった。開店に向けて動き出した武史を見送り少しホッとした心に和之の顔が思い出された。「どうか病気が一日も早く回復しますように」と祈ることしかできない。

このきらめきは、どんな希望も叶えてくれそうな儼かな感じを与えてくれた。

予定通り十一月二十日、新宿の片隅に小さな花屋がオープンしたのである。当日、川崎に住む安史は弟への祝い酒を手に関族代表で出席した。狭い店に友人が十人以上集まり祝ってくれた。台の上には店の名前入りケーキやおにぎり、お酒等が並び皆笑顔だった。美人ばかり集めたような知り合いのチンドン屋さんが五人位で宣伝をして回ってくれたという。そして何よりも嬉しい出来事は病氣回復途中の和之が出席してくれたことでした。

ギターを弾きながら開店祝いの歌を歌ってくれたのです。もちろん作詩作曲は和之でした。後日、安史や武史の話と友人から送られて来た写真や手紙でその日の様子が分かったのです。和之は少し太ったようだ。デビュー当時二人共身長は百八十センチなのに和之の体重は五十キロをわずかに越えているだけだった。武史の話ではその頃も時々腹痛を訴えることがあったという。だがそんな不調は感じさせない迫力ある歌声だった。たった二年のミュージシャンであったが店を出す武史にとって知人が増えたのはとても良いことだったろう。ブログには家に持ち帰っていたアレンジメントが古民家の縁側等で撮られすべて載せられていた。

武史が店を出して間もない頃のこと。スーパーのレジで私の前の奥様がいくつかの小物入れを覗き探し物をしている。どうやら一円足りないようだ。店員は「私がおまけしますとは

言えないんですよ」と困っていた。出過ぎたことかと思ったが「どうぞ」と一円、店員に渡した。「いいんですか。申し訳ないです。ありがとうございます」とホッとしたように言った。

見知らぬ奥様も「すみません、すみません」と何度も頭を下げる。「どうか気になさらないで下さい」とお別れした。一円の為にこんなに感謝されることは人生に二度とあるまい。こんな場面に遭遇して^{B & T}がデビューした頃、ラジオから聞こえて来たお金にかかわるトークが浮かんた。

道にお金落ちていたら何円なら拾うかという内容だった。お互いに聞いたり答えたりしている。百円、五十円、十円、五円の時二人共「拾う拾う」と笑いながら言った。

「じゃあ一円は？」和之の質問に武史は「うーん、拾わないかなあ」「俺も拾わない」和之も答える。ラジオは子供だっけ聞いているかも知れない。せめて一人でも「拾うよ」と言っただけだった。ここで一円の大切さを伝えなくてどうするかと叱りたかった。レジでの出来事が随分たってしまったトーク番組を思い出させた。

武史が花屋をめぐっていた頃、和之は治療に専念する毎日だった。手術は二回に及び、二回目の手術以後、病気は順調に回復していった。だが完治するまでにはいかなない。定期的に病院通いは続いている。治療しながらも作詞作曲、たまには一人でコンサートも開いてい

る。病と戦いながらも目標を曲げない力強いミュージシャンである。

武史はようやく自分の店を開けたと喜びに包まれ歌うことは頭から消えていたのではない。解散から十年近い月日が流れていたのだから。だが二人は又、住む場所が近くなったのだ。和之は武史の店へ来て語り合ったり時には店番もしてくれた。小さい店なのに、もう一人夜の店を開いている友達と三人で「いらっしゃいませ」なんてお迎えすることもあったというからお客様を驚かせたに違いない。ご近所の方から焼そばやお弁当の差し入れがあった話も聞く。少しずつ地域に馴染んでゆけて居るようで安堵した。私達夫婦は母をショートステイに預けて何の連絡も無しに店を尋ねることがあった。お客様が見えたらトイレの前に隠れるようにしている。そんな訳で長居はできない。その後は近所の佇まいを見学したり、公園を散歩したりのんびりした時を過ごして帰宅する。暮らしは成り立っているのだろうか。親とは知らぬ間に子供の心配を始めている。もういい大人だ。ほっておくべきだと思いがらである。

花屋を開いた次の年、母は三月七日無事に百才の誕生日を迎えた。前もって私は武史にお祝いの花の注文をしていた。送られて来たのはピンク色を主体にした華やかでかわいらしい

アレンジメントだ。母の喜びは思った以上だ。「武史の店の花か」「武史が生けたのか」と何度も言った。誕生日を過ぎて三ヶ月程はとても元気が良かったのだがその後ベットで横になる日が多くなった。ある日、お湯でつぶした羊羹を三匙位口に運んであげた。この頃愚知の多くなった母が「おいしいなあ」と、とても穏やかな表情で言った。「お母ちゃんは甘い物が好きだからねえ」と言いながら食器を片付ける為ほんの少しの時間離れた。戻ってみると半身起こしたベットで前をしっかり見つめたまま、すべての動きが止まっていた。苦勞の多い人生だったが百才と九ヶ月を生きぬいた。

花屋を開いて三年目の頃、和之の体調は一ヶ月に一度病院へ行けば良い状態になっていた。元々気が合う二人だ。暇をみては店を訪ねてくれたのだろう。語り合って居ればデビュー当時の思い出に浸る日もあったはずである。一人でコンサートを開いている和之のもとへ自分で束ねた花を手にしてお祝いに登場したこともあった。

そんな日々でのこと。ユーチューブに「^{B&T}電撃復活」の文字とにこやかに握手する二人の動画が流れた。慎重に話し合っ^{B&T}て決めたのだろう。しかし又、母親のしなくても良い心配が始まる。一人で開いている店だ。母の日や年末にアルバイトの女性を頼んでいる。コンサートを開く余裕等あるのか。会場選^{B&T}びから始まり、バンド演奏、照明、音響等の依頼が和之の

肩に多くかかることになるだろう。どこのプロダクションにも属さない二人だ。和之の体調も完璧とは言えないのに無理でしょう！と大きな声で言いたかった。武史の人生だ、自由に生きろと思いつながら私の気持は混乱する。

その後、小さな会場でのコンサートは始まっていた。花屋の休日を選んでいる様子もあつたがいつもそういう訳にはいかない。武史から聞いたが特に和之から強く誘われた訳ではないそうだ。二人共コンサートも無く解散となった日が中途半端な気持ちとなって諦めきれなかったのだろう。私が考えを巡らせている内に「^{B&T}大復活祭」というタイトルで二〇一二年七月二十一日渋谷のコンサートホールで開催されることが決定した。この時始めて夫と参加した。安史とは渋谷駅で待ち合わせ会場まで案内してもらった。函南では私の知るかぎり^{B&T}の大ファンだという人に逢ったことはない。はたしてお客様はどれだけ来て下さるのか。

コンサートが決まった頃「入場料はいらないから何人来られるか教えて。グッズを少し買ってくれたらいいから」その言葉には親孝行らしさが感じられて嬉しかった。だがグッズは馴染みのないものだった。

「ここだよ」安史の言葉に足を止め驚いた。会場の前には行列が出来ている。建物の中まで進んで上を見ると少し高い場所で和之のお母さんが笑顔で手をふっている。和之の病気をどれ程心配したことだろうか。でも、そんな様子は何も感じられない明るさだった。私も思わ

ず笑顔で手をふった。私達は二階席で椅子があった。しかし一階の客席はスタンディングで手すりが並んでいるだけだった。

十六時、いよいよ開演である。会場はお客様で埋まっていた。^{B & T}が登場し歌い出す。ファンの方々の指には赤や青色等の薄紙で作られた花がつけられている。全員が歌に合わせてその腕を高く上げゆらす。まるでそよ風の中に咲く花のように思えた。どなたが作ってくれたのか。和之の親族か、それともファンの方なのか。すばらしい演出だった。迫力のあるバンド演奏、色とりどりの照明が舞台に会場に飛び交う。そして歌い終わる度に上がる拍手と歓声。歌は^{B & T}だけのオリジナルである。十年以上の時を経てミュージシャンとしての望みがここに結集された。

「こんな舞台で二人して歌いたいとずっと思っていました」和之はギターをポロンと鳴らしながらつぶやくように言った。この一言にどれだけの思いが込められているか痛い程分かる。本当に良かったねえと心の中で語りかけていた。入場者は千二百人にのぼったという。コンサートをこんなにも待って下さる人が居たのかと驚いた。これはデビュー当時出されていた^{C D}と和之の一人コンサートの賜物だろう。

終了後、二人は二階席に現れた。二時間を越えたステージである。疲れているはずなのに顔は晴ればれとしていた。「良かったよ」「素晴らしかったよ」と声をかけた。二階席には友

人や親族が多い。

この時、武史は言った。「俺、結婚するから」私にだけ聞こえるような声であったが、この場所で行うことではないでしょうと思った。年令的にも結婚してほしいのは山々だが私の返事は「えーっ」だけだった。彼女は居ると聞いていたが一度も家へ連れて来たこともない。半信半疑で居た。二つの仕事をどこまで続けられるのか。花屋だミュージシャンだと落ち着かないこの状況で「おめでとう」と大喜びする余裕は無かった。武史の言葉に私はいつも右往左往させられる。ほとんどの場合において突然なのだ。

武史のブログと同じように^{B & T}も立ち上げている。^{C D}は十年も前に出された物だからファンは子供の頃からとか、大人になってから知ったとか、さまざまだ。コンサートで歌うのもその頃の曲がほとんどだ。ファンからのコメントはどちらかと言えば楽しいことが多かった。「小学生の頃、給食の時^{B & T}の歌をながして皆で笑った」中には小学生にふさわしくない言葉の入った曲もあった「こんな歌をかけてはいけません」と先生に叱られたというのもあった。「四人の友達とドライブをして笑いころげながら聞いた」等、笑いを誘う歌だった。武史のブログでも花屋なのかミュージシャンなのか分からないコメントが増えた。「ハモニカが良かった」「歌と花屋どちらが本業ですか」「どちらも本業です」答えはいつも同じである。

コンサート会場は座席の有る所が多くなっていた。しかし立ち上がってしまうお客様がほとんどだ。「二度、座りましょう」と和之の声が響く。コンサートやブログの中でも病氣のことを隠すことなく話す。病院生活を歌にまでする。なんという大らかさだろうと何度も思った。

ある日のコンサートの時だった。入場する前に和之のお母さんが話しかけて来た。

「武史君、肺炎になりそうだったんですよ。医師から入院を進められる位だったけど、どうにか回復して開演できます」と言った。

何も聞いていないことである。いよいよ舞台に二人が登場した。武史は一目で痩せたと思った。しかし歌い出せばいつもと変わらない声でハモる様子に安心した。和之は回復に伴い体重は七十キロに近いか超えたかという感じた。デビュー当時と比べると完全に逆転している。たまに行うあのパフォーマンスを今日はするはずがないと思っていた。しかし私の考えが甘かった。そんな身体で和之を肩車してすっかり立っていた。肩の上でゆっくりとリコーダーを吹いているのだ。誰も母親の心配等、知るよしもなく笑いと拍手の中で演奏は終わった。

家の庭に毎年、見事なバラが咲く。武史が益城町から送って来たバラだ。勢い良く成長して春になれば何十個も花を咲かす。道路沿いにある家なので通る人の目に止まり「きれいだねえ」「毎年良く咲くね」と声をかけて下さる人も居て立ち話の種になる。今はあちこち枝を伸ばし一メートルを越える木に成った。益城町に居た頃、又、歌う日が来ようとは考えたこともない。だが武史はどんな仕事についても歌うことが好きな気持は変わらなかっただろう。

これまで何回もコンサートを聞いて来た。二人の舞台はいつも飛び跳ねている感じがして手拍子が出てしまう。心からの喜びにあふれている。いつも趣考を凝らした演出で楽しませてくれた。舞台と会場が一体となって歌が流れることもあった。

結婚した頃、母に「テレビを見なくても繁さんの顔を見れば勝ったか負けたかすぐ分かる」と言ったことが始まりだったと思う。それ以後母は徐々に巨人の大ファンになっていった。夫は子供の頃から一貫して巨人が大好きな人だ。母は何年も見ている間に自然にルールも覚えたりらしい。一人暮らしになっても野球が随分と寂しさをうめてくれたようだ。そのうち「村田が」「仁志が」と選手名まで言うようになった。勝てば繁も喜んでいるなと思いつつに床についたと話したこともある。その母が同居してからは二人並んで野球観戦だ。夫は何も言わ

ず静かに見ている。母は「残念、打たれた」とか「やったやった」とけっこうな声を出す。夫はうるさかったかも知れないがにこやかだ。野球は何を置いても好きなのに歌と言えは演歌を少し歌う位。クラシック、ポップス、フォークソングすべてに興味を示さない。

夫は^{B & T}のコンサートを始めて見た時は感動したようだ。多くのお客様の前で歌う姿も会場の華やかさも楽しんでた。しかし何回目頃から途中で帰ると言うようになった。後五、六曲で終わるのに、その辛抱ができない。まるで子供だ。私に「どうする」の相談も無しに突然「帰るぞ」の一言で立ち上がる。

「最後まで居ようよ」と言っただとしても機嫌を損ねるのは分かっている。帰りの電車は気分良く帰りたい。私は^{B & T}の一挙手一投足までもしっかり見たいといつも思っていた。だが東京は私にとって外国のような所だ。^{B & T}後ろ髪を引かれる思いで帰るしかない。最終電車に間に合いません。いそうもなく帰ったことも数回は有ったが。

二〇二二年正月。帰省した武史が居間で語り合っていた時「歌、やめるから。今年六月のコンサートが最後になるよ」と言った。

あれ程、興味が湧かなかった夫が「やめるのか？本当に。なんで」と相当ショックを受けて

いたのは以外だった。何事も自分で決めて来た武史だ。私が歌を続けてほしいと言った所で変わらないだろう。どうしてやめるのか詳しく話そうともしない。「最近、あまりパツとしな
いしね」と私が軽く言う。「そんなことはない」とちよつと腹立たしい口調で答えた。私の
知らない所で応援して下さる人がたくさん居るのだろう。二人のコンサートを見られなくな
るのは寂しいが一つの仕事に打ち込む方が何となく落ちつけていいのではないかとも思う。
武史はかけがえのない家族を守る責任もある。和之は^{B&T}の名のままミュージシャンを貫く
という。備わっている能力を思う存分發揮してくれるはずだ。

その年の六月十二日、東京の会場で^{B&T}ファイナルコンサートが開かれた。席に座って、こ
れが最後かと思ひながら回りを見た。武史には、ふり回された人生だったけれど楽しさとい
つぱい与えてくれた。再結成当時程の人氣は有るのだろうかと思つたが開演のせまつた客席
は埋まつていた。二人の歌が始まるといつもと変わりない活気と明るさでステージも会場も
盛り上がった。こんなに素晴らしくハモる声で歌えるのにやめてしまうのかとやり場のない
残念な気持ちが入みあがる。長い間、たくさんの人を楽しませてくれてありがとう。元気で
居てくれてありがとう。

コンサートが終わっても申し合わせたように立ち上がらないお客様。「本日のコンサート

は、すべて終了です」のアナウンスにようやく動きが見られた。できるならファンの方一人一人にこれまで応援して下さった感謝の気持ちを伝えたいと思った。

家のタンスには袋に入ったままのオレンジ色のＴシャツがしまわれている。二十年以上前のものだ。ミュージシャンとしてデビューした弟をことの他、喜んでいた安史だった。まだコンサートも開かれていない時のこと。グッズが売り出されたのを知り、すぐ三着のＴシャツを注文したという。その内の二着を私達にプレゼントしてくれた。嬉しかったがさて、いつ着ようか迷った。寝る時着るのはなんだかもったいない。かと言って出かける時着るのは勇気があるなと思う。たまに出してながめたりしていた。その内、タンスに存在するのも忘れかけていた。歌をやめることが決まり、そういえばと思い出したのだ。

七十代後半となった私。年と共に明るい色を身に着けた方が良いという意見も多い。羽織った上着にオレンジ色をのぞかせて出かけようかと思ったりしている。

函南町に住んで四十三年。今はどこよりも落ちつける場所となった。

B & T のパートナー和之氏の敬称は略させていただいた。

登場人物の名は仮名です。

紆余曲折を経てコンサートを開く日を迎えた二人づれのミュージシャンが居た。
ひとつの物語りとして書いてみた。

オレンジ^{いろ}色の T シャツ

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 ^{やよい} 弥生

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

次男は言った。「サラリーマンにはなりたくない」。

同級生とともに自分の道を進む息子に、母は心配を重ねながらも、いつも優しく見守っていた。

これはとあるミュージシャンと、その家族の歩みが描かれた人生の物語。

